

## 平成 2 8 年度愛知県外来種調査結果の概要

## 1. 条例公表種等に関する情報収集

県内に生息生育する外来種（国外移入種及び国内移入種）のうち、淡水域における外来種を対象とし、県内の生態系に著しく影響を及ぼすおそれのある移入種（外来種）として「自然環境の保全及び緑化の推進に関する条例」に基づき愛知県が公表する種、特定外来生物及び特に悪影響の懸念される外来種の中から以下の14種を選定し、主として既存資料調査（文献調査、標本調査）及びヒアリング調査により、生息生育情報等を収集・整理した。

- |                            |        |
|----------------------------|--------|
| ① ナガバオモダカ（オモダカ科）           | 【加筆修正】 |
| ② アマゾントチカガミ（トチカガミ科）        | 【新規作成】 |
| ③ ナガエモウセンゴケ（モウセンゴケ科）       | 【新規作成】 |
| ④ オオカワヂシャ（オオバコ科）           | 【加筆修正】 |
| ⑤ ハビコリハコベ（ハエドクソウ科）         | 【加筆修正】 |
| ⑥ オオバナイトタヌキモ（タヌキモ科）        | 【加筆修正】 |
| ⑦ ウチワゼニクサ（ウコギ科）            | 【加筆修正】 |
| ⑧ カミツキガメ（カメ目 カミツキガメ科）      | 【加筆修正】 |
| ⑨ ミシシippiaカミミガメ（カメ目 ヌマガメ科） | 【加筆修正】 |
| ⑩ カラドジョウ（コイ目 ドジョウ科）        | 【加筆修正】 |
| ⑪ ブラウントラウト（サケ目 サケ科）        | 【加筆修正】 |
| ⑫ オヤニラミ（スズキ目 ケツギョ科）        | 【加筆修正】 |
| ⑬ ヨコシマドンコ（スズキ目 ドンコ科）       | 【加筆修正】 |
| ⑭ ハブタエモノアラガイ（基眼目 モノアラガイ科）  | 【新規作成】 |

これらの調査結果について種ごとに整理を行い、「ブルーデータブックあいち 2012」に準じた1種あたり1頁（A4版）程度の概要を記載した文書を作成した。なお、「ブルーデータブックあいち 2012」にて既に文書が掲載されている種については、最新の情報に基づき文章を加筆修正し、該当箇所を赤字で示した。掲載されていない種については、新たに文書を作成した。

【加筆修正】

種子植物 <被子植物Ⅱ類 オモダカ科>  
SPERMATOPHYTA <ALISMATACEAE>

重点対策, 条例

ナガバオモダカ *Sagittaria graminea* Michx.

【概要と選定理由】

多年生の抽水植物。ジャイアントサギタリアの名で栽培される観賞用水草で、栄養的に繁殖して大きな群落を作る。希少な植物が多く生育する愛知県の湿地に侵入すれば、大きな影響を与えるおそれがある。国の要注意外来種とされている。愛知県ではまだそれほど多くないが今後分布を拡大する可能性があり、予防的な意味で県条例公表種にも選定された。

【形態】

茎は短く、葉を束生する。葉ははじめ葉柄と葉身の区別がなく、線形、長さ12~20cm、幅0.7~2cmであるが、後から出る葉は長い柄があり、葉身は線状楕円形、長さ8~15cm、幅1.5~2.5cm、先端は鈍頭、辺縁は全縁となる。花期は8~9月、花は長い花茎の先に通常3個ずつ数段輪生し、雌花は直径約1.5cm、花弁は3枚で白色、中央に球状に集まった多数の雌ずいがある。

【分布の概要】

【世界の分布】

原産地は北アメリカ。世界各地で栽培される。

【国内の分布】

本州のところどころで逸出帰化が報告されている。

【県内の分布】

西: 豊田市旧市域北西部(山崎玲子 1631, 1997-9-9)、岡崎市旧市域北部(杉田一記 529, 2010-5)。  
尾: 東海知多(東海市)(吉鶴靖則 655, 2015-4)、名古屋南東部(名東区)(鳥居ちゑ子 3357, 2014-6)。  
千種区東山植物園内奥池や名東区他の場所でも生育が確認されている。

【生育地の環境／生態的特性】

ため池や水路。走出枝を出して栄養的に繁殖する。

	山地	丘陵	平野	海浜
森林				
草・岩				
湿地				
水域			○	

【侵入の経緯／現在の生育状況】

野生状態のものは、日本では1970年代に京都府の深泥池ではじめて確認された。おそらく投棄により逸出したものと思われる。愛知県ではまだそれほど多くないが、今後平野部や丘陵地の水辺各地に広がるおそれがある。

【被害状況／駆除策と留意点】

繁殖力が旺盛で冬も枯れないため、一度定着すると在来の水生植物群落に大きな影響を与える可能性が高い。発見したらなるべく早い段階で抜き取る必要がある。熱帯魚水槽で栽培される観賞用水草には、本種のほかにボタンウキクサ、アマゾントチカガミ、ハビコリハコベ、ウチワゼニクサなど、野外に逸出すると旺盛に繁殖し、在来植物群落に深刻な影響を与えるものが少なくない。増殖して余った場合でも絶対に野外に投棄しないよう、特に注意する必要がある。

【特記事項】

葉形は在来種のヘラオモダカに似ているが、ヘラオモダカは走出枝を出さず、花序が大きく横に広がり、花は小さく両性である。

【関連文献】

平帰化 p.236, 農教 I p.403, 角野康郎. 1994. 日本水草図鑑 p.21. 文一総合出版, 東京.

(芹沢俊介・瀧崎吉伸)

【新規作成】

種子植物 <被子植物Ⅱ類 トチカガミ科>  
SPERMATOPHYTA <HYDROCHARITACEAE>

重点対策

アマゾントチカガミ *Limonbium laevigatum* (Humb. et Bonpl. ex Willd.) Asch.

【概要と選定理由】

浮遊性の多年生水草。観賞用に広く栽培されるが、野外に逸出すると急速に繁茂して他植物の生育を妨げる厄介な植物である。耐寒性は弱く、愛知県内のほとんどの地域では冬を越せないと思われるが、名古屋市内では越冬・定着している。

【形態】

水中茎が横に伸び、各節から根と3~8枚の葉がロゼット状に展開する。葉身は円形で、長さ、幅ともに15~40mm、しばしば斑が入る。裏面は膨らみ、厚さ5mm程度に達することもある。花期は不定であるが6~9月、雌雄同株で雄花と雌花がある。雌花は子房下位で長さ3~4cmの子房の上に小さな3枚の萼片がつき、長さ5~10mm、6~9本の白色の雄しべの柱頭が伸びるように立つ。雄花は長さ40~50mmの花柄の先につき、各3枚の萼片と花片からなる。花片は幅1.5mm、長さ6mmほどで内側に湾曲する。

【分布の概要】

【世界の分布】

原産地は中南米。世界各地で栽培される。

【国内の分布】

本州、四国、九州。

【県内の分布】

尾: 犬山(永田芳男 s.n., 2008-10)、名古屋北部(中区名古屋城、芹沢 89698, 2014-9)、名古屋南東部(緑区桶狭間神明、中村 肇 1069, 2015-10, N)、名古屋南西部(港区西福田、中村 肇 1100, 2015-8, N)。中村氏によれば、名古屋市名東区猪高緑地、中区名城公園などでも確認されている。また、2010年頃に県民から愛知県に寄せられた情報では、あま市(旧甚目寺町)の水路での確認(小菅崇之氏)、刈谷市内のため池で繁殖していたが現在はみられないという情報(鳥居亮一氏)もある。

【生育地の環境／生態的特性】

ため池や水路。走出枝を出して栄養的に繁殖する。

	山地	丘陵	平野	海浜
森林				
草・岩				
湿地				
水域			○	

【侵入の経緯／現在の生育状況】

前種と同様、もともとは観賞用に栽培されていたいわゆるアクアリウムプランツの一つである。愛知県では2008年に永田芳男氏により、犬山市木曾川河川敷の岩場にある水たまりで、葉径1~2cmの小さい個体がはじめて確認された。この場所では冬を越せず消滅したが、その後名古屋市内の各地で見られるようになり、越冬もしている。

【被害状況／駆除策と留意点】

名古屋市内ではところどころに定着しており、他植物への影響も出はじめている。

【特記事項】

葉形は在来種のトチカガミに似ている。

【関連文献】

角野康郎. 2014. ネイチャーガイド 日本の水草 p.93. 文一総合出版, 東京.

(芹沢俊介・瀧崎吉伸)

【新規作成】

種子植物 <被子植物Ⅲ類 モウセンゴケ科>  
SPERMATOPHYTA <DROSERACEAE>

特定, 重点対策

ナガエモウセンゴケ *Drosera intermedia* Hayne

【概要と選定理由】

多年生の食虫植物。代表的な食虫植物であるモウセンゴケ *D. rotundifolia* L.によく似ており、自然状態で両者が混生している場所では雑種 *D. × beleziana* E.G.Camus も存在する。モウセンゴケの自生地に侵入すれば当然競合・圧迫・遺伝的攪乱が考えられる。国の特定外来生物に指定されている。

【形態】

茎は短く、地面から葉を放射状に出す。葉には 3cm 程のはっきりした葉柄があり、葉身はさじ形、長さ 10mm、幅 5mm 程で腺毛があり、先に粘液を分泌して小さな昆虫を捕まえる。春から夏にかけて 5cm 程の直立する花茎を出し、直径 4mm の白色の 5 弁花を穂状につける。つぼみの時は花茎の先は下垂するが、果期には完全に直立する。

【分布の概要】

【世界の分布】

ヨーロッパ、北アメリカ北部に分布し、各地で栽培される。

【国内の分布】

愛知県、岡山県、千葉県。

【県内の分布】

尾：尾張旭市（村松正雄 21755, 2003-7）、東海市（林彰一 223, 1990-6）。増田氏の観察では、豊橋市天伯町天伯湿地（2012 年確認）、名古屋市守山区小幡緑地（2015, 2016 年確認）、同大森八竜湿地（2016 年確認）、名古屋市千種区東山公園周辺（2014 年確認）にも生育している。

【生育地の環境／生態的特性】

浅い丘陵地の湿地や崖地に生育する。

	山地	丘陵	平野	海浜
森林				
草・岩				
湿地		○		
水域				

【侵入の経緯／現在の生育状況】

食虫植物マニアの手によって、おそらくは意図的に植栽または投棄されたのではないかと思われる。1990 年代には稀であったが、近年急速に増加し、ところどころで見られるようになった。東海地方の湿地、ため池、水路などの水深の浅い場所に生育している。葉や根などからさかんに栄養繁殖し、個体数を増やしている。開花期も 5 月から 10 月にかけて非常に長く、種子生産量も多いが活性のある種子は少ない。生育地が乾燥した場合や被陰されたときには個体数が減少するが、モウセンゴケやトウカイコモウセンゴケよりも高く成長するため、他のモウセンゴケよりも日光に対する競争力が高い。八竜湿地、小幡緑地、東山公園などの生態系の保護区でも生育が確認されている。

【被害状況／駆除策と留意点】

モウセンゴケに似ているが、葉身は長さ 10mm、幅 5mm ほどのさじ形である。岡山県では本種を含めた外来食虫植物の駆除作業が行われているが、除去作業に伴う踏みつけや攪乱などの湿地生態系へのダメージが大きく、問題になっている（片山・西本 2004）。

【引用文献】

片山博行・西本 孝, 2004. 岡山県における外来食虫植物の侵入状況. 岡山県自然保護センター研究報告(12):31-37.

【関連文献】

農教Ⅱ p.58.

(増田理子・芹沢俊介)

【加筆修正】

種子植物 <被子植物Ⅳ類 オオバコ科>  
SPERMATOPHYTA <PLANTAGINACEAE>

特定, 緊急対策

オオカワヂシャ *Veronica anagallis-aquatica* L.

【概要と選定理由】

水辺に生育する冬型 1 年生草本。在来種のカワヂシャ（国 NT）に似ており、また同じような場所に生育するが、より大形で繁殖力も旺盛である。比較的自然度の高い低湿地的環境に侵入することから、生物多様性への影響が懸念される。国の特定外来生物に指定されている。

【形態】

茎は直立または斜上し、大きいものは高さ 1m に達する。葉は対生し、無柄で茎を抱き、長楕円形、長さ 4~8cm、幅 1~2cm、先端は鋭頭~鈍頭、両面無毛、辺縁の鋸歯は目立たない。花期は 4~7 月、茎の上部の葉腋から長さ 8~15cm の総状花序を出し、多数の花をつける。花冠は青紫色、皿形で深く 4 裂し、直径 6~8mm である。蒴果は球形、残存花柱は長さ 2~3.5mm である。

【分布の概要】

【世界の分布】

ユーラシア大陸北部に広く分布する。

【国内の分布】

本州、四国、九州。

【県内の分布】

東：豊橋北部（中西普佐子 3144, 2009-4）、尾：犬山市（芹沢 88408, 2013-5）、春日井市（山田果与乃 1551, 2010-5）、豊山町（鳥居ちる子 3342, 2014-5）、名古屋北部（鳥居ちる子 2688, 2009-4）、一宮西部（芹沢 90183, 2014-6-6）。豊根村富山地区（小林 2006）からも記録されている。愛知県では庄内川の下部に生育しているだけであったが、最近になって豊川、木曾川、豊山町空港南側の水路などでも確認されるようになった。

【生育地の環境／生態的特性】

湿地に生育し、特に河川敷に多い。

	山地	丘陵	平野	海浜
森林				
草・岩				
湿地			○	
水域				

【侵入の経緯／現在の生育状況】

日本への侵入時期ははっきりしないが、昭和初期にはすでに神奈川県などで帰化していたという。近年全国各地の河川などで著しく増加し、水辺に大きな群落を形成している。愛知県の場合、庄内川では 2000 年頃から確認されるようになったが、その後しばらくは個体数が少ない状態で推移しており、爆発的に増加するという状況にはならなかった。しかし最近になって庄内緑地公園などで大きな群落が見られるようになり、今後の動向が懸念される。

【被害状況／駆除策と留意点】

愛知県では現在のところ特段の環境影響は生じていない。しかし今後急激に増加すれば、カワヂシャをはじめとする多くの低湿地性植物に影響を与えると思われる。

【特記事項】

在来のカワヂシャに比べ全体に大きく、花はオオイヌノフグリに似て大きく青紫色である。葉縁の鋸歯は小さくてほとんど全縁に見える、この点で花がない時期でも識別できる。庄内川ではカワヂシャとの雑種ホナガカワヂシャも確認されている。

【引用文献】

小林元男. 2006. 北設楽の植物 p.195. 愛知県林業試験研究推進協議会.

【関連文献】

平帰化 p.189-190, 農教Ⅰ p.300-301.

(芹沢俊介・瀧崎吉伸)

【加筆修正】

種子植物 <被子植物IV類 ハエドクソウ科>  
SPERMATOPHYTA <PHRYMACEAE>

重点対策, 条例

ハビコリハコベ *Glossostigma elatinoides* (Benth.) Benth. ex Hook.f.

【概要と選定理由】

小型の多年生草本。アクアリウムの前景草として、「グロッソスティグマ」の園芸名で流通している。陸生型はパッチ状の密生群落を形成し、地表を完全に覆い、同所に生育する1年生植物の存続に影響を与える可能性が高い。現在のところ生育地は消失しているが、今後他の場所に投棄されるおそれがあることから、予防的な意味で愛知県の条例公表種に選定された。

【形態】

茎は細く、地表を長く這って分枝し、密集した群落を作る。葉は対生し、長さ2~10mmの柄があり、葉身は楕円形~倒卵形、長さ2~5mm、幅1~2.5mm、先端は円頭、辺縁は全縁、無毛、やや肉質で光沢のある濃緑色である。水中葉は細長いさじ形で、陸上葉よりも薄く、長さ20mm程度になる。花期は7~11月、花は葉腋に1個ずつつき、長さ3~5mmの柄があり、花冠は白色で5裂し、直径2~3mmである。



ハビコリハコベ 田原市 2008年10月 瀧崎撮影

【分布の概要】

- 【世界の分布】  
原産地はオセアニア。
- 【国内の分布】  
広く栽培されるが、野外で確認されたのは現在のところ愛知県だけである。
- 【県内の分布】  
東：田原市(旧渥美町)(瀧崎 24934, 2008-10)。

【生育地の環境/生態的特性】

浅い水中や、水が引いてできる水辺湿地に生育する。陸生型になるが、完全に乾いた環境では生育できない。地下茎は切れやすく、切れた断片が発根して栄養的に繁殖する。

	山地	丘陵	平野	海浜
森林				
草・岩				
湿地			○	
水域			○	

【侵入の経緯/現在の生育状況】

国内では田原市の初立池に野生化していたが、おそらくアクアリウムの管理をしきれなくなった何者かが投棄したか、あるいは意図的に植え込んだものと思われる。一時期池の全周を覆いつくすほどに繁殖したが、池の耐震工事のため水を落とした結果、乾燥に耐えられず消失したらしく、現在は確認できない。

【被害状況/駆除策と留意点】

初立池の周囲には何カ所かの湧水があり、秋期水が引いたときにクロホシクサ(国VU, 県EN), スズメノハコベ(国VU, 県NT), ミズニラ(国NT, 県NT)などの絶滅危惧種やその他の稀少な湿地性植物が生育する。このような小型の1年生植物は、多年草で沈水状態でも生育できるのハビコリハコベが先に密生した群落を形成してしまうと、種子の発芽や幼植物の生長が阻害される可能性が高い。直接的な除去は細い根茎が残存するため効果が薄く、また他の在来種に悪影響を与えるおそれもある。再度、あるいは新たな場所に投棄されないよう、啓発に努めることが重要である。

【関連文献】

農教II p.358-359.

(瀧崎吉伸・芹沢俊介)

【加筆修正】

種子植物 <被子植物IV類 タヌキモ科>  
SPERMATOPHYTA <LENTIBULARIACEAE>

重点対策

オオバナイトタヌキモ *Utricularia gibba* L.

【概要と選定理由】

多年生で沈水性の繊細な食虫植物。在来種のみかわたヌキモ(イトタヌキモ) *U. exoleta* R.Br. (国:VU, 県:EN, 愛知県2009参照)によく似ており、両者を同一種内の変種関係にあると考える人もいる。みかわたヌキモの自生地に入れば当然競合・圧迫が考えられるが、別の場所にあるだけでも保全上困難な問題が生じる。

【形態】

茎は糸状で底土上をはい、捕虫囊をつけた地中葉で固着するが、水中を浮遊することもある。水中葉はまばらに互生し、長さ1cm程度、1~3個の裂片に分かれ、まばらに捕虫囊をつける。裂片は幅0.1~0.2mmである。花期は8~10月、高さ6~10cmの花茎を水上に伸ばし、1~2個の花をつける。花冠は黄色で直径約1cm、距は前向きで通常下唇よりやや長い。

【分布の概要】

- 【世界の分布】  
東南アジア, オーストラリア, アフリカ, アメリカ大陸。
- 【国内の分布】  
記録は少ないが、おそらくところどころで逸出しているものと思われる。
- 【県内の分布】  
東：田原市(旧渥美町)(瀧崎 26069, 2009-9T)。西：豊田市旧市域東部(畑佐武司 2249, 2001-8), 岡崎市旧市域北部(杉田一記 2331, 2011-9)。尾：尾張旭市(村松正雄 22239, 2004-8), 日進市(村松正雄 26459, 2012-8), 豊明市(浅野守彦 2150, 2009-9), 阿久比町(林彰一 536, 1990-8), 常滑市(中井三従美 40, 1988-9), 名古屋市北部(守山区)(高木順夫 14594, 2006-10), 名古屋市南東部(天白区)(浜島繁隆 s.n., 1970-9), 同(昭和区)(芹沢 88946, 2013-9), 同(瑞穂区)(渡辺幸子 4451, 2000-9)。豊田市旧市域北西部(伊保町三ツ池)でも確認されている。岡崎市南部にも生育しているという。

【生育地の環境/生態的特性】

浅い丘陵地のため池に生育する。

	山地	丘陵	平野	海浜
森林				
草・岩				
湿地				
水域		○		

【侵入の経緯/現在の生育状況】

食虫植物マニアの手によって、おそらくは意図的に投棄されたのではないと思われる。名古屋市南東部(天白区天白町)では1968年8月から見られたが、これが国内で野生状態が確認された最初の記録と思われる(浜島氏私信)。

【被害状況/駆除策と留意点】

みかわたヌキモは花が直径5~6mmであるが、それ以外の点では本種に大変よく似ていて、花がなければ識別は困難である。そのため、みかわたヌキモの自生地に入れば本種が侵入すれば、選択しての除去はほとんど不可能である。また、この類の自生地が新たに発見されても、オオバナイトタヌキモかみかわたヌキモかわからなければ、保全の対象にすべきかどうかの判断もつかない。このように、絶滅危惧種に極めてよく似た移入種は、「ある」というだけで大変厄介である。

【引用文献】

愛知県(2009) p.236.

【関連文献】

農教II p.238, 角野康郎. 1994. 日本水草図鑑 p.153. 文一総合出版, 東京.

(芹沢俊介・瀧崎吉伸)

【加筆修正】

種子植物 <被子植物IV類 セリ科>  
SPERMATOPHYTA <UMBELLIFERAE>

**ウチワゼニクサ** *Hydrocotyle verticillata* Thunb. var. *triradiata* (A.Rich.) Fern.

【概要と選定理由】

長い地下茎をひく多年生草本。水辺に密集した群落を形成し、在来の水辺植物に影響を与えるおそれがある。近縁種のブラジルチドメグサが国の特定外来生物に指定されているが、ブラジルチドメグサは現在のところ熊本県以外では確認されていない。環境省のホームページではウチワゼニクサという和名はブラジルチドメグサの通称とされており、両種が混同されているようにも見える。全国に急速に広がりつつあるのはウチワゼニクサの方で、実際にはこちらの方が問題が大きい。

【形態】

地下茎は白色で細く、地中を長くはい、各節から多数の根と1枚の葉を出す。葉は長さ10~30cmの柄があり、葉身は楕形について円形、直径2~7cm、無毛、辺縁には浅い欠刻があるが、ほとんど全縁に見えることもある。花期は5~11月、花茎は葉腋から出て長さ10~20cm、花はその上部に数段輪生する。結実の確認していない。

【分布の概要】

【世界の分布】  
原産地は北アメリカ。日本のほか、中央アメリカ、ヨーロッパ、アフリカ北西部、オーストラリアに帰化している。  
【国内の分布】  
本州、九州、琉球。  
【県内の分布】  
東：豊橋市北部（芹沢 83799, 2008-11）。西：岡崎市旧市域北部（芹沢 86304, 2010-9）。尾：豊明市（浅野守彦 2154, 2009-9）、知多南部（南知多町）（村松正雄 27344, 2014-5）、春日井市（山田果与乃 2092, 2014-7）、名古屋市北部（守山区）（村松正雄 25135, 2010-5）、同（西区）（鳥居ちゑ子 2993, 2011-10）、名古屋市南東部（昭和区）（鳥居ちえ子 3285, 2013-10）、名古屋南西部（中川区）（中村 肇 664, 2014-7, N）。

【生育地の環境／生態的特性】

ため池や河川の岸、小規模な水たまりなどの水湿地に生育する。止水域でも流水域でも生育でき、流れのある水辺では地下茎を水流にたなびかせるようにして広がる。豊橋市柳生川では、切れた地下茎の断片が下流に流れ着いて発根し、増殖している。

	山地	丘陵	平野	海浜
森林				
草・岩				
湿地			○	
水域				

【侵入の経緯／現在の生育状況】

ウォーターマッシュルームの名で熱帯魚水槽用の植物として販売されており、繁殖したものが捨てられて各地で野生化している。販売サイトではビオトープへの導入も勧めていて、その目的で野外に植栽されることもある。愛知県では豊橋市飯村町柳生川で2005年に確認された。現在この場所では、ミゾソバやアキノウナギツカミなどの在来水辺雑草を圧倒して純群落を形成している。名古屋市守山区では、意図的に植え込んだものが広がってしまったという。

【被害状況／駆除策と留意点】

愛知県内では現在のところ在来希少種への直接的影響は確認されていないが、今後本種がそのような植物が多い場所に侵入すれば、大きな影響を与えることは十分想定される。対策としては、本種を野外に投棄したり植栽したりしないことが最も重要である。一度定着すると、除去しても細い根茎が残存するため、根絶は極めて困難である。

【特記事項】

タテバチドメグサとも呼ばれる。

【関連文献】

平尾化 p.153, 農教 1 p.224.

(芹沢俊介・瀧崎吉伸)

【加筆修正】

脊椎動物・爬虫類 <カメ目 カミツキガメ科>  
VERTEBRATA REPTILIA <TESTUDINES CHELIDRIDAE>

特定、緊急対策、日 100

**ホクベイカミツキガメ** *Chelydra serpentina* (Linnaeus, 1758)

【概要と選定理由】

ホクベイカミツキガメは北アメリカ大陸原産の大型の淡水生のカメで、トウブカミツキガメ *C. serpentina serpentina* とフロリダカミツキガメ *C. s. osceola* の2亜種からなる。同属別種にメキシコカミツキガメ *C. rossignonii*、ナンベイカミツキガメ *C. actirostris* がある。日本で流通し、野外で見つかるのはほとんどがトウブカミツキガメで、フロリダカミツキガメはまれに見つかる程度である。大量の水生生物を捕食し、地域の生態系を攪乱する。噛む力が比較的強く、四肢の爪も大きく、人間にけがを負わせる危険性もある。千葉県では内水面漁業に被害が生じている。国の特定外来生物および緊急対策外来種に指定され、日本の侵略的外来生物ワースト100にも選定されている。

【形態】

甲羅に対して大きな頭部と四肢を持つ。顎は頑強で、四肢は太く、指の先には大きな爪がある。尾が長く、尾の背面に三角形の突起が付け根から一列に並んでいるのが特徴である。在来のニホンイシガメやクサガメに比べ、腹甲は小さい。甲長は50cm近くになる。体重は10kgを越えるものもあり、最も重いもので34kgという記録がある。

【分布の概要】

【世界の分布】  
原産地の北アメリカでは、メキシコ湾沿岸から五大湖よりもやや北方のカナダ南部まで、ロッキー山脈の東側から東海岸まで分布しており、環境への順応性の高さが示唆される。フロリダカミツキガメはフロリダ半島にのみ分布し、それ以外にトウブカミツキガメが広く分布している。  
【国内の分布】  
北海道から沖縄県まで全国各地において野外で個体が見つかる（小林 2007）。千葉県印旛沼水系と東京都練馬区光が丘公園では野外での繁殖が確認されている。特に印旛沼水系では急増しており、防除事業で2010年には300頭弱、2011年には505頭が捕獲されている。  
【県内の分布】  
愛知県では名古屋市、瀬戸市、春日井市、岩倉市、日進市、大口町、東海市、豊田市旧市域、豊橋市、豊川市旧市域で保護された事例がある（矢部 2010 に、その後執筆者が保護に関わった事例で未発表のものを追加した）。野外での繁殖は確認されていないが、2014年に春日井市の庄内川水系と瀬戸市の矢田川水系（庄内川水系に属する）で15cmを下回る小型の個体が確認され、4歳以下の若い個体も捕獲された。一つの水系で複数の子ガメが見つかるという事態が重視され、2015~2016年度にかけて環境省による捕獲調査が実施されている。この結果によっては、愛知県も千葉県・東京都・静岡県に続いて野外繁殖県と判断される可能性がある。

【生息地の環境／生態的特性】

ワニガメが餌をおびき寄せて捕食する待ち伏せ型なのに対して、本種は餌を求めて水底を徘徊したり水面に泳いできたりする探索型である。肉食性が強い雑食性のカメで、保護した個体の糞の量と内容物から推測すると、かなりの大食いで、さまざまなものを食べている。

【侵入の経緯／現在の生息状況】

愛玩動物として甲長5cmほどの稚ガメが輸入され、流通していた。Franke and Telecky(2001)によれば、1997年には7903頭のカミツキガメがアメリカ合州国から日本に輸入されており、1992年から1999年にかけては年あたり千頭前後ないしは数千頭の規模で輸入されていたと思われる。2000年施行の「動物の愛護及び管理に関する法律」によりカミツキガメ科の動物として特定動物に指定され、2005年施行の「特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律」により、特定動物から外されて新たに特定外来生物に指定され、飼育個体の野外への放逐は厳禁となり、流通や飼育には厳しい制限が課せられている。

【被害状況／駆除策と留意点】

さまざまな動植物を大量に食することから、地域の生態系を攪乱する恐れがある。危険を感じると、首を急激に長く伸ばして噛み付く。ワニガメとは異なり、大人の指が噛み切られることはないと思われるが、大けがをすることはあり得る。引っ搔かれた時も、場合によってはひどい出血を伴うけがを負う。印旛沼水系では仕掛けた定置網に本種がかかり、漁業の障害となっている。防除としては、目撃情報があったらなるべく早めに罠、釣り、その他の方法を駆使して捕獲しなければならない。繁殖力が旺盛なので、移入直後の個体数が少ない時に駆除する必要があるが、既に爆発的増加期の直前のような状態になっている可能性があり、早急な対策が望まれる。

【引用文献】

Franke, J. and T. M. Telencky. 2001. Reptiles as Pets : An examination of the trade in live reptiles in the United States. 146pp. The Humane Society of the United States, Washington, D.C..  
小林頼太. 2007. 日本におけるカミツキガメおよびワニガメの定着危険性：新聞記事を用いた外来ペットの逸出モニタリング。爬虫両棲類学会報 2007(2): 101-110.  
矢部 隆. 2010. 愛知の脊椎動物. 愛知県史 別編 自然 pp.162-207, 597-618. 愛知県.

【関連文献】

Steyermark, A. C., M. S. Finkler and R. J. Brooks (eds.). 2008. Biology of the snapping turtles (*Chelydra serpentina*). 225pp. The Johns Hopkins University Press, Baltimore.

(矢部 隆)

【加筆修正】

脊椎動物・爬虫類 <カメ目 ヌマガメ科> 条例, **緊急対策** (ともに種アカミミガメとして), 日 100, 世 100  
VERTEBRATA REPTILIA <TESTUDINES EMYDIDAE>

ミシシippアカミミガメ *Trachemys scripta elegans* (Wied, 1839)

#### 【概要と選定理由】

3 亜種あるアカミミガメ *Trachemys scripta* の一亜種で、日本を含め世界各地に導入され定着しているのは、ほぼすべてこの亜種である。別亜種のキバラガメ *T. s. scripta* はまれに見られる程度であり (岡田ほか 2005), キンバーランドキミミガメ *T. s. troostii* はまず見られない。放逐された個体はいったん定着すると、急激に個体数を増やし、生態系を攪乱する。種アカミミガメとして愛知県の条例公表種および国の**緊急対策外来種**に選定されており、亜種ミシシippアカミミガメとして日本と世界の侵略的外来種ワースト 100 に選定されている。

#### 【形態】

喉に黄色い縞模様があり、耳の上に朱色の斑紋があるのが特徴である。しかし高齢なオスは黒化し、これらの模様は消えるので、同定には注意を要する。二次性徴でオスの前肢の爪が伸びる。

#### 【分布の概要】

##### 【世界の分布】

自然分布は北アメリカのミシシipp川下流域である。外来生物としては、日本、台湾、韓国、タイ、オーストラリア、西ヨーロッパから南ヨーロッパにかけての各国、南アフリカなどで野外に放逐されて定着、繁殖している。

##### 【国内の分布】

北海道～沖縄。

##### 【県内の分布】

平成の大合併前の 88 の旧市町村中、**46** 市町村で確認されている (以上は、岡田ほか 2005, 小鹿・小鹿 2006, 矢部ほか 2010, 山田ほか 2008 の報告, 野呂達哉氏私信, およびその他の資料や未発表データをまとめた)。三河地方の山間部や北尾張地域を除き、県内の河川や池沼に広く定着している。

#### 【生息地の環境／生態的特性】

平地から丘陵地にかけての水の流れが緩やかな河川や池沼におもに生息するが、河川の中上流域でも見つかることがある。在来のカメよりも水質汚染への耐性が強い。在来のにホンイシガメやクサガメと同様に年 2 回程度産卵するが、1 回あたりの産卵数はにホンイシガメの 6~7 個、クサガメの 10 個前後に対して 15 個前後であり、個体数の増加速度が速い。

#### 【侵入の経緯／現在の生息状況】

1960 年代後半からアメリカ合州国で養殖された稚ガメが安価で大量にペットとして流通するようになり、1980 年代と 1990 年代には年間 100 万頭近く輸入されていた。2000 年代以降、輸入個体数は半減もしくはそれ以下になっていると思われるが、輸入は続いている。

県内のいくつかの野外個体群で生態や形態を詳細に観察したところ、栄養障害などによる成長速度の異常や甲の変形により、飼育個体が放逐されたものよりも、野外で繁殖した個体の方がかなり多いと考えられる。

#### 【被害状況／駆除策と留意点】

在来のにホンイシガメやクサガメ、にホンスッポンと食物、あるいは日光浴や産卵や越冬の場所をめぐって競合し、在来種を駆逐してしまう場合がある。本県に隣接する山除川水系において、本種、にホンイシガメ及びクサガメの糞を分析した結果、陸生植物の種子や単子葉植物などの植物質のもの、スクミリンゴガイを中心とする巻貝、アメリカザリガニなどの動物質のものなどが 3 種間で共通して多く出現しており、餌資源をめぐる種間競合が起こる可能性が示唆された。また、本種の糞からは在来カメ類以上に植物質のものが多く出現しており、在来カメ類の生息場所 (ねぐら等) や餌となる生物 (巻貝, エビ・カニ類, 水棲昆虫の幼虫など) の供給場所を破壊している可能性が示唆された (田村未発表)。名古屋市や安城市では、池や堀に植栽したハスを食べ、消失の一因となっている。にホンイシガメやクサガメとは異なり積極的に噛み付くので、捕獲したときなどに出血を伴うけがを負うことがある。

防除策としては、まずペットとして流通し、飼育されている個体の野外への放逐を徹底的に禁止しなければならない。すでに野外に定着している個体は、ワナを使って継続的に捕獲するしかない。

#### 【引用文献】

岡田夕季・矢部 隆・山田智子・小林浩之・前澤勝典・織田鉄一. 2005. 三河地方西部における淡水産カメ類の分布. 矢作川研究(9): 5-17.  
小鹿登美・小鹿 亨. 2006. 安城市の淡水カメ類-安城市史自然編の調査からの考察-. 安城市史研究(7): 33-40.  
矢部 隆・野呂達哉・間野隆裕. 2010. 矢作川河畔林の両生類と爬虫類. 矢作川研究(14):35-38  
山田雄哉・上木原慶彦・芹沢俊介. 2008. 愛知県中部における在来および外来淡水産カメ類の分布. 豊橋市自然史博物館研究報告(18): 35-45.

#### 【関連文献】

矢部 隆. 2010. 愛知の脊椎動物. 愛知県史 別編 自然 pp.162-207, 597-618. 愛知県.

(矢部 隆)

【加筆修正】

脊椎動物・魚類 <条鰭魚綱 コイ目 ドジョウ科> 条例, **総合対策**  
VERTEBRATA PISCES <COBITIDAE>

カラドジョウ *Paramisgurnus dabryanus* Dabry de Thiersant, 1872

#### 【概要と選定理由】

ドジョウによく似ている。国内の水田周辺水路などに広く定着し、在来のドジョウと競争関係にある可能性が指摘されている。愛知県の条例公表種、国の**総合対策外来種**に指定されている。

#### 【形態】

体長は 15 cm 以上に達する。ヒゲが長く、最長のものは吻長より長い (ドジョウでは短い)。ウロコがやや大きい。尾鰭基底上部に暗色斑が無く (ドジョウにはある)、尾柄高が尾柄長とほぼ等しい。尾柄部が尾鰭から膜状につながり尾柄高が高くなるという見方もある。

#### 【分布の概要】

##### 【世界の分布】

中国、朝鮮半島、台湾、インドシナ半島などを原産地とする。

##### 【国内の分布】

本州・四国の 17 県 (宮城県、栃木県、他) で確認されている。

##### 【県内の分布】

水路 (小牧市, 北名古屋市), 水路 (一宮市), 庄内川 (名古屋市守山区), 黒川 (名古屋市北区), 戸田川流入水路 (名古屋市港区), 山崎川 (名古屋市瑞穂区), 目比川 (稲沢市), 五条川 (清須市), 水路 (碧南市), 矢作川のワンド (安城市), 水路 (刈谷市), 捨石川 (幸田町)。

#### 【生息地の環境／生態的特性】

水田水路や中小規模の河川に生息する。雑食性で、底生ミジンコ類やホウネンエビ、ミズムシ、ユスリカ幼虫などの底生無脊椎動物を捕食する。

#### 【侵入の経緯／現在の生息状況】

現在多くの地域で確認されるようになったカラドジョウは、食用として輸入されるドジョウに混入し、遺棄されて侵入した可能性がある。侵入の詳細な年代は不明だが、1961 年に兵庫県などから得られたドジョウ類の標本にカラドジョウが含まれていた可能性が指摘されている (藤田 2007)。現時点で、愛知県内において本種の分布拡大を示唆するデータは得られていない。しかし、本種は在来魚類が著しく減少した水田水路に生息する事例も見受けられ、他の外来種同様に人為的改変により自然度が低下した場所で定着する傾向がある様子がうかがえる。

#### 【被害状況／駆除策と留意点】

ドジョウと区別することが困難であるため、ドジョウの放流に混じって全国に拡大する危険性がある。在来種のドジョウも本種と同様の食性を持ち、生息場所選択をするものと考えられ (加納ほか 2007), 種間の競争により負の影響を受ける恐れがある。しかし、本種の排他的な影響による在来種の分布域の縮小等を示唆する結果は報告されていない。一方、本種とドジョウは、交雑したとしても雑種第一代が 3 倍体になるため、遺伝的攪乱は起きにくいとされる (You et al., 2009)。ただし、繁殖干渉でドジョウが減少する原因にはなるかもしれない。現時点の結論として、愛知県内では、カラドジョウが生態系に及ぼす被害の実態を把握する調査努力量が十分とは言えないため、予断を許さない。イギリスではドジョウ類そのものの輸入規制がかけられているように、我が国でも予防原則を適用し、少なくとも定着水域から他水域への持ち出しが起らないよう、早急な法的整備が望まれる。電気ショッカーとタモ網を併用した駆除が推奨される。

#### 【特記事項】

食用に輸入されたドジョウを生体のまま遺棄するとカラドジョウが混じっている恐れがある。適切な管理が不可欠である。

#### 【引用文献】

加納光樹・斉藤秀生・淵上聡子・今村彰伸・今井仁・多紀保彦. 2007. 渡良瀬川水系の農業水路におけるカラドジョウとドジョウの出現様式と食性. 水産増殖 **55**: 109-114.  
藤田朝彦. 2007. 本邦で確認されている“カラドジョウ”の学名について. 魚類学雑誌 **54**: 243-244.  
You, C., X. Yu, and J. Tong. 2009. Detection of hybridization between two loach species (*Paramisgurnus dabryanus* and *Misgurnus anguillicaudatus*) in wild populations. *Environmental Biology of Fishes* 86:65-71.

(谷口義則)

## 【加筆修正】

脊椎動物・魚類 <条鱈魚綱 サケ目 サケ科>  
VERTEBRATA PISCES <SALMONIDAE>

産業管理, 日 100, 世 100

## ブラウントラウト *Salmo trutta* Walbaum, 1792

### 【概要と選定理由】

魚食性が強く、日本と世界双方で侵略的外来種ワースト 100 に選ばれており、国の**産業管理外来種**に指定されている。国内では養殖や管理釣り場で多用され、遊漁目的で全国の水域に導入されている。漁業権が設定されている水域も見られるが、北海道のように捕食や競争により在来生物相に多大な影響を及ぼしている可能性が指摘されたため、内水面漁業調整規則により移入を禁止している自治体もある。

### 【形態】

全長 50cm 以上に達する。特に降海型の大型個体では体長 100cm を越える。ニジマスに似るが、体側にあるやや大型の黒斑と朱赤色の斑点が散在する。ニジマスに比べて尾がやや四角く、尾柄（尾の付け根）がやや太い。多回産卵で、4~5 歳魚で 2000~3000 粒の卵を産む。

### 【分布の概要】

#### 【世界の分布】

ヨーロッパ全域からアフリカ北部が原産地。北米、オセアニア、アジアなど世界各地に移入され定着している。

#### 【国内の分布】

本州、北海道で定着している。

#### 【県内の分布】

宇連川（旧豊根村）、豊川水系（設楽町）、木曾川（一宮市）、**矢作川水系段戸川（豊田市）**。

### 【生息地の環境／生態的特性】

溪流、小・中規模河川、湖沼に生息する。中底層を好み、魚類、陸生・水生昆虫、甲殻類などを捕食する。ニジマスよりも攻撃的で競争力があるとされる。

### 【侵入の経緯／現在の生息状況】

アメリカ合衆国を通じて日本に侵入し、釣り人による密放流により分布を拡大している。北海道の 36 河川 48 箇所が生息が確認されているほか（斎藤・鈴木 2006）、**本州でも、長野県梓川（Kitano, 2004）、栃木県中禅寺湖流入河川（若林ほか, 2002）、岐阜県宮川（石崎ほか, 2012）、山口県佐波川（谷口, 未発表）に定着しているものと推定される。**県内の矢作川水系支流の段戸川では、**2014 年に調査を行った 17 ヶ所中 10 ヶ所で 1.9 個体/100 m<sup>2</sup>、2015 年に 13 ヶ所中 3 ヶ所で 0.2 個体/100 m<sup>2</sup>、2016 年に 13 ヶ所中 6 ヶ所で 1.2 個体/100 m<sup>2</sup>とそれぞれ低密度ながらも毎年ブラウントラウトが確認されている（谷口, 未発表）。**また、毎年体長 7~8cm の個体が確認されていることから、**自然繁殖が濃厚である。**源流部にブラウントラウトを放流していた管理釣り場が存在することから、**ここから逸出した個体が起源である可能性がきわめて高い。**

### 【被害状況／駆除策と留意点】

本種が移殖されたアメリカ合衆国、ニュージーランドにおいて競争および捕食により在来魚類の分布域縮小や地域的絶滅等が起きている。日本でも、在来魚シマウキゴリ (*Gymnogobius opperiens*)、イトヨ (*Gasterosteus aculeatus*)、ヒメマス (*Oncorhynchus nerka*) の他に、絶滅危惧種ニホンザリガニ (*Cambaroides japonicus*) が捕食されている（中田ほか 2006）。また、水生昆虫も多く捕食されている。さらに、イワナ属魚類との交雑も確認されている（Kitano et al., 2009）。よって、本種の影響は在来水生動物に広範囲に及ぶと言える。既に在来魚の分布がブラウントラウトに置換された河川も存在する（鷹見ほか 2002）。上述した通り、段戸川のように外来魚類を対象魚として利用する管理釣り場の運営はまさに未必の故意であり行政にはこれの監督義務がある。河川では電気ショッカーを使用した駆除が推奨される。

### 【特記事項】

管理釣り場、養魚場等からは容易に自然河川に逸出するものと考えらるべきである。

### 【引用文献】

石崎大介・谷口義則・淀 太我. 2012. 岐阜県神通川水系小鳥川におけるブラウントラウトの定着. 魚類学雑誌 **59**: (印刷中).  
斎藤寿彦・鈴木俊哉. 2006. 北海道のサケ・マス増殖河川におけるニジマスおよびブラウントラウトの生息状況. さけ・ます資源管理センター技術情報 **172**: 1-24.  
鷹見達也・吉原拓志・宮腰靖之・桑原 連. 2002. 北海道千歳川支流におけるアメマスから移入種ブラウントラウトへの置き換わり. 日本水産学会誌 **68**: 24-28.  
中田和義・中岡利泰・五嶋聖治. 2006. 移入種ブラウントラウトが淡水産甲殻類に及ぼす影響: 絶滅危惧種ニホンザリガニへの捕食. 日本水産学会誌 **72**: 447-449.

### 【関連文献】

梶山雅秀. 2002. ブラントラウト. 日本生態学会(編), 外来種ハンドブック p.113. 地人書館, 東京.  
Kitano, S. 2004. Ecological impact of rainbow, brown and brook trout in Japanese inland waters. Global Environmental Research **8**: 41-50.

(谷口義則)

## 【加筆修正】

脊椎動物・魚類 <条鱈魚綱 スズキ目 ケツギョ科>  
VERTEBRATA PISCES <PERCICHTHYDAE>

条例, 総合対策, 国内移入

## オヤニラミ *Coreoperca kawamebari* Temminck et Schlegel, 1843

### 【概要と選定理由】

西日本の河川を自然分布域とするが、放流に由来するとみられる個体群が県内数カ所に見られる。愛知県の条例公表種であり、**国の総合対策外来種（国内由来）に指定されている。**他県でも同様に条例で指定外来種として移出入を制限しているところがある。

### 【形態】

成魚は最大体長 13cm 程度。海産のメバル類に似た印象があり、側扁し、比較的口が大きい。尾鰭は円形をしている。鰓蓋の後部に黄色く縁取られた藍色の縦長の眼状紋（眼よりやや大きい程度）があり、目と眼状紋の間には目を中心に放射状の赤褐色の条が数本走る。額は上唇から背鰭前半部まで白い。体色は全体的に褐色だが、短時間に変化することが多い。体側後半に 6~7 本ある横縞は判別できないこともある。

### 【分布の概要】

#### 【世界の分布】

日本の固有種。同属魚が朝鮮半島南部を含む東アジアで計 4 種知られる。

#### 【国内の分布】

京都府以西の本州、四国北部、九州北部の河川を自然分布域とするが、放流に由来するとみられる個体群が、愛知県以外にも、東京都、滋賀県に分布する。

#### 【県内の分布】

五条川（犬山市）、**蛇ヶ洞川（瀬戸市）**、乙川（岡崎市、額田町）、男川（岡崎市、**額田町**）、矢作古川（西尾市）、**拾石川（幸田町）**、**豊川水系（新城市）**。

### 【生息地の環境／生態的特性】

西日本では大河川の中・下流域および流入河川や周辺の水路などの透明度が比較的高い緩流域に生息する。岸边近くの浅く、抽水植物等が生える水草帯を好む。群れず、縄張りを持ち（排他性が強く）単独生活をする。愛知県内の調査からも、主に動物食で水生・陸生の昆虫、甲殻類等を捕食することが明らかにされている。繁殖期は春から秋にかけて長いが、ピークを 5 月頃に迎える。雄は縄張りを持ち、求愛行動により雌を産卵場所に誘う。植物等に産み付けられた粘着卵は雄によって手厚く保護される。同所的に生息するムギツクによって托卵されることも知られる。

### 【侵入の経緯／現在の生息状況】

熱帯魚店、インターネットでペットとして販売されることもあり、飼育中の個体の屋外遺棄、移殖放流行為が問題となっている。生態系攪乱及び病気の伝播が憂慮される。愛知県内では、2004 年頃より生息が確認されるようになった。一部のマニアによる本種の自然繁殖促進を目的とする意図的な放流が起源と推測できる情報がある。**2016 年に五条川上流部では延べ 20 カ所中 13 カ所でオヤニラミが確認され、平均個体数密度は 2.9 個体/100 m<sup>2</sup>と高くはないものの、流程 2km あまりにわたり本種が定着している（谷口, 未発表）。**平均, 最大, 最小の体長は、それぞれ 4.8cm, 9.2cm, 1.6cm であった。また、これら生息状況は、**2009 年に愛知県自然環境課が行った調査の結果と顕著な相違はなく、低密度ながら確実に自然繁殖している状況が確認できている。**

### 【被害状況／駆除策と留意点】

本種は、自然分布域では開発による生息地の破壊や水質悪化、オオクチバス等の外来魚類による食害により生息数が減少し、府県レベルで絶滅危惧種に、環境省 RDB で絶滅危惧 II 類 (VU) に指定されている。そのため、マニア等による乱獲規制を主な目的とする条例が設けられている自治体もある（徳島県、香川県等）。一方で、本種の自然分布域外の滋賀県では、無秩序な移入放流による在来生態系攪乱を防ぐために、遺棄・無届け飼養に懲役・罰金刑が条例で定められている（田中ほか 2010）。愛知県では、**上記の五条川における調査の結果、低密度のため、現時点で在来魚類等への深刻な影響は検出されていない。**また、県内でも分布は比較的限定されている。しかしながら、本種の強い縄張りや食性の特徴を考慮すると、捕食・競争の影響が懸念される。現状ではいかなる理由があろうともオヤニラミの放流を行ってはならない。**電気ショッカーを使用した駆除が推奨される。**

### 【特記事項】

オスが卵を保護する様子から「親が睨みを効かす」こと等が和名の由来とされる。

### 【引用文献】

田中大介・鈴木誉士・中川雅博. 2010. 滋賀県大石川における国内外来魚オヤニラミの定着. 南紀生物 **52**: 58-60.

### 【関連文献】

国立環境研究所. 侵入生物データベース <http://www.nies.go.jp/biodiversity/invasive/index.html>  
香田康年・渡辺宗孝. 2002. オヤニラミ. 川那部浩哉・水野信彦・細谷和海(編), 山溪カラー名鑑 改訂版日本の淡水魚 p.486-489. 山と溪谷社, 東京.

(谷口義則)



【加筆修正】

脊椎動物・魚類 <条鰭魚綱 スズキ目 ドンコ科>  
VERTEBRATA PISCES <ODONTOBUTIDAE>

ヨコシマドンコ *Micropercops swinhonis* (Günther, 1873)

#### 【概要と選定理由】

体色が明るく体全体の横縞が目立つ魚。既に東海、関東地方に移入され定着していると考えられ、さらなる分布の拡大を防ぐ目的で詳細情報を記述した。

#### 【形態】

体長 10cm 程度。体側に横縞があるのが特徴的で、在来種のドンコ *O. obscura* から明瞭に区別できる。

#### 【分布の概要】

##### 【世界の分布】

東アジア（中国、朝鮮半島）原産。中央アジアに移植されている模様。

##### 【国内の分布】

東海・関東地方。

##### 【県内の分布】

梅田川（豊橋市）。

#### 【生息地の環境／生態的特性】

国内では、卵仔魚の発生に関する報告はあるが、生態に関する報告は非常に限られる。抽水植物帯のある河川淀みを選好する。食性は動物食で、水生昆虫、甲殻類等小動物を幅広く捕食する。産卵は、ドンコと同様に石の裏に親が逆さになって行われるようである。

#### 【侵入の経緯／現在の生息状況】

侵入年代は不明。2000 年の河川水辺の国勢調査により、愛知県豊橋市において採集されたのが国内で最初の記録である。中国から輸入された釣り餌用のエビ類に混入していた報告もあり(平嶋 2006)、これが生体のまま遺棄されたか、釣り人やマニアによって意図的に放流された可能性もある。観賞魚としても流通している。既に関東地方に分布を拡大している。**県内の本種の分布は大きく変化していないように思われる。しかし、梅田川のように、従来から分布している場所ではコンスタントに確認されている（浅香, 未発表）。しかも、調査時常に幼魚が確認されている（浅香, 未発表；荒尾, 未発表）。一方で、どのような生物種においても個体数はいつ増大しても不思議はない。そのため、県内のヨコシマドンコについても警戒を怠らない態勢を維持するべきである。**

#### 【被害状況／駆除策と留意点】

縄張りを持つと考えられ、同所的に生息する在来魚類に競争的影響を及ぼす恐れがある。荒尾ほか (2010) は、梅田川（豊橋市）で 99 個体の本種を採捕し、水生昆虫（ユスリカ、コカゲロウ、チョウバエ、シマトビケラ、ミズムシ、ミジンコ類を捕食していたことを報告している。また、同水域では低密度であるものの、原産地ではタイリクバラタナゴやモツゴと共に優占する水域があることから、日本においても今後注意が必要である。本種が在来種ドンコと同様に縄張りを持つか否かは明らかにされていないが、同所的に生息する魚種に対する競争・捕食の影響についても指摘されており、今後定着水域からの持ち出しにいつそうの注意が必要である。分布域が限定されている現段階において、個体群を完全に駆除する必要があると思われる。**2016 年に梅田川におけるヨコシマドンコおよび同所的に生息する在来魚類の状況から、特に本外来種が在来種に著しい負の影響を与えていることは確認できない（浅香, 未発表）。電気ショッカーとタモ網を併用した駆除が推奨される。**

#### 【特記事項】

観賞魚として流通している状況を解決する必要がある。

#### 【引用文献】

荒尾一樹・加納光樹・横尾俊博 2010. 愛知県の梅田川中流域における外来魚ヨコシマドンコ（ドンコ科）の季節的出現と食性. 日本生物地理学会会報 **65**: 43-49.  
平嶋健太郎. 2006. 釣り餌用生きエビに混入する外来魚. 南紀生物 **48**: 1-5.

#### 【関連文献】

Iwata A., H.Saka, K. Shibukawa and S-R. Jeon. 2001. Developmental characteristics of a freshwater goby, *Micropercops swinhonis*, from Korea. Zoological Science **18**: 91-97.

（谷口義則）

【新規作成】

軟体動物・貝類 <汎有肺目 モノアラガイ科>  
MOLLUSCA <PANPULMONATA LYMNAEIDAE>

総合対策

ハブタエモノアラガイ *Pseudosuccinea columella* (Say, 1817)

#### 【概要と選定理由】

原産地は北アメリカで、タイプ産地の詳細は不明であるが（Say, 1817）、アメリカ合衆国のフィラデルフィア周辺であると推定されている（Pointier *et al.*, 2007）。20 世紀に中・南アメリカ、ヨーロッパ、アフリカ、アジア、太平洋の島々、オーストラリアの淡水域に移入したと考えられている（Pointier *et al.*, 2007）。日本では 1980 年に初めて琵琶湖南湖で生息が確認された（品川, 1981；紀平ほか, 2003）。一部ネット上では群馬県で最初に発見され、高橋 (1980) によって報告されたと記されているが、高橋 (1980) では種名不明のまま *Radix* sp.として図示されることも無く報告されているので、詳細を確認することはできない。日本国内では関東から東海地方、近畿、中国、四国に分布が拡大している（木村, 1994；増田・内山, 2003）。本種は水草などに付着して各地に移入、定着していると考えられる。東海地方ではやや富栄養化した水質の湖沼、ため池等の止水域、流れの緩やかな河川、水路などにも広く生息する。本種の経済的被害は報告されていないが、モノアラガイ類と同様に肝蛭など吸虫類の中間宿主となることが知られている（Pointier *et al.*, 2007）。本種は後述する様な分布拡大するために有利な繁殖生態を保有していて、里山などの身近な生態系に生息する在来淡水貝類の生息に影響与える可能性もある。

#### 【形態】

殻高最大で 20 mm 程度の小型の淡水産巻貝。通常殻高 10 mm 前後の個体が多い。殻は薄質で半透明、殻表には弱い光沢があり淡茶白色から飴色であるが、殻表は藻類が繁茂したり、黒色の付着物で覆われている場合も少なくない。殻口は大きく、蓋は無い。同じ科に属するヒメモノアラガイ、モノアラガイなどと類似するが、殻がやや細長く、体層もあまり膨れない。また殻表には強い成長脈と細い螺肋が交差し、布目状（画像中央）になり日本産の近似種とは区別される。和名のハブタエ（羽二重）はこの特徴的な布目状の殻表に由来する。

#### 【分布の概要】

##### 【世界の分布】

北アメリカ原産の種であるが、現在では前述の通り世界中の淡水域に広く分布が拡大している。

##### 【国内の分布】

1980 年前後に日本に移入したと考えられ、現在では関東地方から中国、四国地方まで広く分布している（増田・内山, 2003）。

##### 【県内の分布】

愛知県からの本種の産出報告は 1985 年から 1993 年までの淡水貝類相調査をまとめた報告(木村, 1994) で初めて記録された。木村 (1994) では愛知県内の調査 27 地点の内、幡豆郡の 1 地点で生息が確認されただけである。その後、豊橋市 (河辺, 2002)、蒲郡市 (木村, 2005) で生息が確認され、現在では県内の平野部を中心に広く生息が確認されているので、明らかな分布の拡大傾向が認められる。

#### 【生息地の環境／生態的特性】

前述の通りやや富栄養化した止水域や流れの緩やかな河川下流域、水路などに広く分布する。ただし、生息地での個体数は、ヒメモノアラガイやサカマキガイと比べると少なく、群生することも少ない。卵生で、乳白色を帯びた半透明なゼラチン質の卵囊（卵塊）を水中の水草や石などに付着させる（紀平ほか, 2003）。本種は飼育実験によって単為生殖することが明らかにされており、侵入初期の定着可能性と分布域の拡大に貢献する可能性があることが指摘されている（高倉, 2008）。

#### 【侵入の経緯／現在の生息状況】

水草などと共に、非意図的に移入された種と考えられている。観賞用の水草の流通に伴って分布を拡大した可能性も考えられる。

#### 【被害状況／駆除策と留意点】

経済被害はほとんど報告されていないが、観賞用水槽における水草類の食害、ゼラチン状の卵塊による見場の悪さなどで、本種を駆除する薬剤、器材なども販売されている。閉鎖した水槽などでは駆除剤等による対応は可能であるが、野外での完全な駆除は不可能であろう。

#### 【引用文献】

河辺訓受. 2002. 石巻山周辺淡水貝観察調査会報告. かきつばた 28: 31-32.  
紀平肇・松田征也・内山りゅう. 2003. 日本産淡水貝類図鑑.①琵琶湖・淀川の淡水貝類. 159 pp. ピーシーズ, 東京.  
木村昭一. 1994. 東海地方の淡水貝類相. 研究叢報(第 33 報): 14-34. 全国高等学校水産教育研究会.  
木村昭一. 2005. 蒲郡市西田川の貝類相. かきつばた 31: 32-35.  
増田 修・内山りゅう. 2003. 日本産淡水貝類図鑑.①琵琶湖・淀川の淡水貝類. 159 pp. ピーシーズ, 東京.  
品川和久. 1981. ハブタエモノアラガイ (和名新称) について *Pseudosuccinea columella* (Say, 1817) ?. かいなかま 15 (3): 13-14.  
Pointier, J. P., Coustau, C., Rondelaud, D.&Theron, A. 2007. *Pseudosuccinea columella* (Say, 1817) (Gastropoda, Lymnaeidae), snail host of Fasciola hepatica: First record for France in the wild. Parasitology Research. 101 (5): 1389-1392.  
Say T. 1817. Description of seven species of American fresh water and land shells, not noticed in the systems. Journal of the Academy of Natural Sciences of Philadelphia 1(1-2): 13-18.  
高倉耕一. 2008. 大阪およびその周辺地域に優占する外来巻貝ハブタエモノアラガイ *Lymnaea columella* (Say)とその自家受精による繁殖能力. 大阪市立環科研報告 70: 43-51.  
高橋茂. 1980. 東毛の淡水貝. ちりぼたん 11(2): 34-36.

#### 【関連文献】

岩崎敬二. 2002. 外来種リスト（軟体動物）. *In* 日本生態学会（編）. 外来種ハンドブック p.315-317. 地人書館, 東京.  
（木村昭一）











